

信濃の花火

清水いく子

私は、学生時代のある時期を、善光寺の門前町である長野で過した。その中で、二つの花火見物の思い出がある。ひとつは妻科神社の秋祭の「森花火」であり、他のひとつは地付山で行なわれた夷講の打上花火である。

その後上京してから、私の住んでいた南県町から十分足らずの裾花川の淵にある北上玩具店で、日本でも数少ない線香花火の製造が行なわれていたことを知った。線香花火は、この玩具店から、杏で有名な更埴地方に下請けに出され、紙縫によられている。又、花火師で初めて黥六等に叙せられた青木儀作さんも、森と並ぶ杏の里、安茂里の方という。信濃は、花火の製造、そして花火をすることの盛んな場所であることは、あまり知られていない事実である。

唯一つ、こういう記憶だけが私には妙にはつきりと残っている。——或る晩、母が私を背中におぶって、土手の上に出た。そこには人々が集って、空を眺めていた。母が言った。「ほら、花火だよ、綺麗だねえ……」みんなの眺めている空の一角に、ときどき目のさめるような美しい光が蜘蛛手にはあつと弾けては、又ばあつと消えてゆくのを見ながら、私はわけも分からず母の腕のなかで小躍りしていた。……注(1)

これは、堀辰雄の幼年時代が一番最初の記憶である。子どもの頃、縁先でした線香花火や、納涼打上花火のことを、「単なる懐しい思い出」として以上に「自分の人生の本質のような」原体験として、心のどこかに持っている人は多いと思う。花火は、子ども時代の原体験として誰にでも共有されながら、一瞬の揺らめきである美しさ、輝しさとは反対に、すぐに消え暗闇に捨て去られてしまいう運命にあった。このように一時の華やかさを秘めつつも、常に人間の生活の脇役であり続けて来た花火については、あまり記された物もない。しかし主役にはなり得なかった故に、花火には人々に顧られることになかった数多くの物語が秘められているのではないか。そんな、もう闇の中に忘れ去られようとしている花火の一面を「信濃の花火」を考えることによって、少しで

も明らかにできたらと思う。

——江戸での花火の発達——

日本への花火の伝播は、戦国時代の天正年間（一五七三—一五九二）で鉄砲伝来とともに南蛮より伝来した。慶長十八年（一六一三）夏、徳川家康が、唐人の打上げ花火を駿府城で見物した記録が、駿府政事録に見られるという。

その後、泰平の江戸時代の中で、花火は軍事用を離れ、町人の遊楽として発達し、慶長年間から、三十年余を過ぎた慶安元年（一六四八）には、花火の作り売りや、町中での花火揚げ禁止の触書が出る程の流行ぶりであった。

——「川中島の戦い」の残したもの——

さて、江戸でこのように盛んになった花火は、四方を山で囲まれた信濃にはどのように伝わっていったのであろうか。信濃では戦国時代に「川中島の戦い」が行なわれた。天文年間に日本に伝来した火薬は、戦国大名である武田信玄、上杉謙信にも逸速く伝わったに違いない。戦国史中の花と言われる永禄四年秋の川中島の戦いの中にも、狼煙は重要な役割を果たしている。旧暦八月十六日謙信の率いる越軍が、千曲川の対岸妻女山に陣を構えた。その

警報は、紅葉に彩られた信濃の山々の頂に設けられた狼煙により、急遽甲府に伝えられ、信玄は出陣する。二十日余りも妻女山に滞陣した越軍は、九月十日の暁に秘かに「雨宮の渡し」を越え、信玄が十二段の陣を構えている背後に出る。頼山陽により、「鞭声粛々、夜河を渡る……」と歌われた八幡原の戦いとなる。

この川中島の戦いは、五角の両軍が三週間も対峙し、死力を尽して闘ったにも拘らず、結果は引き分けで終わった。両軍とも過半の死傷者を出した丈で、実際面では全く獲る所がなかった。斯くして織田勢の世となったが、この戦いは後の世まで人々の心の中に多くのものを残し語り続けられた。この点では、川中島の戦いは暗い戦国の世に、美しく輝いて散ったひと筋の花火のような気がする。

今日の花火製産地は、川中島の戦いの戦場となった北信の地と重なる。そして花火を職業としている人の祖先の中には、秋祭の若衆として村に古くから伝わる花火製作の秘法から、自分の一生の仕事にまで高めた人もいる。この戦いには、土着の人が数多く借り出されていたことを思うと、軍事用の狼煙が花火になんらかの影響を及ぼしていることは当然と思われる。

——花火の道、三州街道——

さて、川中島の戦いの狼煙からの道とは別の、もうひとつの信濃への花火の道が考えられる。それは、徳川家康の誕生の地、三河の岡崎から三州街道を経て、飯田へ伝わり松本を経て、北信へ伝わる経路である。

飯田藩の古文書（近世郷土年表に所収）によると、江戸の市村と二十〜三十年ずれる丈で、次のような花火の記録が見られる。

（注・旧暦、太陽暦では二か月ずれる）

- 寛文十年七月（一六七〇） 人家附近にて花火を出すを禁ず
- 正徳二年八月十日（一七二二） 郊戸神社祭礼にて初て花火を揚る

○文化十一年八月十四日（一八一四） 今宮花火祭礼の夜、松一芳兵衛傷を受け田町吉右衛門、半兵衛、仁兵衛、大藏、久藏五人を相手取り訴へ後、扱金廿兩に依り示談となる。

○天保十四年八月二十二日（一八四三） 村々鎮守祭礼に付無届にて花火打上の向きありしも以来は必ず其品数届出づ可く触、但、打上狼煙、大流星は前通り停止

三河より飯田藩に伝わって来た花火は、郊戸神社の秋祭に初めて行なわれて以来、事故が多く、停止の命が出ているにも拘ら

ず、鎮守秋祭の景物として村々に広がっていった。

——妻科神社の「森花火」——

明治に入って、更埴、長野の村々では、秋祭に花火が行なわれていた。更埴郡では明治二十年頃、花火は秋祭の呼び物であった。庭花火、仕掛け花火に工夫を凝らし、生萱村、その隣村の倉科村、森村等が技術を競っていた。

長野の妻科神社の「森花火」も明治中頃に始まった。妻科神社は、貞観二年（八六〇）に作られた古い神社で、善光寺名所図会にも描かれているように、由緒ある槻の林に囲まれている。二百十日の大嵐を防ぎ稲の豊作を祈る風祭である九月三十日の夜、森花火が行なわれる。

森花火というのは、神社の森の枝から枝へと綱を渡し、そこに花火が仕掛けられる。宵祭の夜、神楽や神輿が鳥居を潜るのを合図に一斉に火が付けられる。花火は綱から綱へと森じゅうに広がり、それまで暗闇の中にあつた境内は、木々のシルエットと花火の明りで槻の木に一瞬花が咲いたようである。

大正十年前後が一番盛んだったと言われ、村の青年達が寄り集まって花火を作り、取り付けていたが、次第に規則が喧しくなり、今では、殆んど煙火師がやるようになった。

——二尺玉の祖、高野一道——

更埴市生萱村いぶがの高野一道（一八三三—一九二二）は、蘭法医で順庵と号し、彼の仁術に浴した者は多かつた。彼は余技として煙火打ち上げの技を研究し苦心の末、二尺玉を作った祖である。

『兩宮県村誌』には次のように書かれている。

一道は、三河国岡崎の旅廻りの花火師を彼の家に寄食させ、製法を学ぶとともに研究をした。そして半年の苦心の末、正味一尺八寸の大玉を製造した。当時の筒は、鉄製でなく松の木で筒に仕上げ、長さ一丈、底の直径五尺、筒口の直径二尺（「二尺玉」と呼ばれる所以）、これに竹の箍かぶを隙間なく掛けたものであった。

明治二十四年、一道は尺八寸の二尺玉二箇を造り、秋祭の晩に始めて打ち上げるようになった。その評判は大したもので、近郷近在はもとより、長野、上田、遠くは三河、名古屋などから見物に来た者もあり、生萱の田は多くの群衆で埋ったという。しかし、これは失敗に終る。

明治三十三年まで、村の小学校は兩宮の来迎庵という廃寺を使用していた。この年十月、校舎が唐崎に新築され、運動場もない障子の学校から、広い校庭に建ったガラス戸の洋風の校舎に移った。村の理事者は、何か催しをして、この喜びを記念したい意向

であった。協議の末、開校式には二尺玉の打ち上げをし、祝意を表わすことに決定し、一道を訪れ依頼した。そして一道は、これを全国に先駆けて見事に成し遂げたのである。

——初冬の風物詩——恵比寿講の花火——

二尺玉の成功した明治三十三年には、花火においてもうひとつの画期的なことが行なわれた。長野の初冬の風物詩となつてゐる、夷講の仕掛け花火が、西之門町の鷲沢平六さんの後援で、初めて柳町の高土手から打ち上げられたことである。県下に二十三軒あつた煙火師が全員参加し華やかに行なわれた。

夷講の十一月二十日は、当時一月の初売りと並ぶ年に二度の大売出しで、長野の町は、収穫を終えた近在の田舎からの買物客で、その賑わいは大変なものだった。これからやって来る厳しい冬に備えて、人々は、足袋や手袋、外套等を買いに街に出る。

今日でも、長野の人達は、花火の始まる時間になると、二階の見晴しの良い部屋に炬燵を囲んで集まる。漬たての野沢菜や、ひんやりと冷い熱柿じゆしを食べながら、一晚を花火見物で楽しむのである。その頃は、初雪の舞うことも多く、昨年の花火は、薄すずらと粉雪の積った千曲川の川原で打ち上げられたという。花火の番付が、大門の金華堂で夷講の間際になると売り出される。番付を

求めて来て、次はどんな火花が上るのかと想像しながら見たりするのを楽しみのひとつである。

現在では長野の夷講は、青木、藤原煙火店の二軒で行なっているが、ここ数年、新しく開発されたスターマイン等素晴らしい火花が上っているという。鷲沢さんの死後、商工会議所が首頭を取るようになり、戦争で中止された昭和十七・二十三年を除き、毎年行なわれ昨年で七十二回も続いている。

打上げ場所も、最初の柳町の高土手から、住宅地の拡大により、安茂里の水道山、丹波島の橋の下、地付山等と移動し、今日では千曲川の河川敷で上げている。

——客神、恵比寿——

ここで夷講について、民俗学的立場から考えてみたい。夷は、福神として広く信仰されている神のひとつである。穏和な神像が一般的であるが、荒夷と称し、崇り神とも言われ、信仰形態も複雑である。しかし、夷の語が外国人を意味するのからもわかる通り、本来は遠い異郷より寄り来て、幸をもたらす寄神、客神であったことは明確である。信濃の夷神は、百姓夷と商人夷とが土地柄、うまく結び付いた。

信濃では、作神、田の神を夷と呼ぶ所が多い。田舎裏のある部

屋に、夷を祭る神棚が設けられる。そこに、橋板の三枚目を用いて彫った、狩衣、指貫、風折烏帽子を付け、脇に鯛を抱いた福々しい木像が祭られている。正月三日には、太くて鯛の形をした福縄を張る。田植終いの早苗鑿なぶりには、稲苗をあげ、稲刈の初めに新稲穂を穂掛して豊作を感謝する。そして十一月二十日の夷講には、夷神が出雲の大社から出稼を終え帰ったと言って、鯛、蕎麦、とろろ、小豆飯に加え、豊穰、瑞祥を表す二股大根や、夷のように福々しいおやきを供え祝う。

商家にとっては、夷は、福利を招来し市場を保護する商いの神である。折口②、和歌森③によると、市は、もとは冬に立ったもので、市日が山の神祭であった。本来、市という言葉は「齋いづく」より来たのであり、その神を祭る場所が市であった。市神は、市姫という山の神女であり、商売繁昌を祈念した。この市神が、何時からか夷神に替って来たのである。

市神としての夷神の記録は古く、東大寺(一一六三)、鎌倉鶴ヶ岡八幡(一二五四)、大和竜田新宮(一二四五)の境内に夷神を奉祀した記録がある。中世の商業の発達に伴い、西宮の夷社が栄えた。近世には、夷講という商人の祭祀団体として一般化した。関西では夷講の日を「誓文払い」といい、一年中で商売の駆引きに嘘をついた罪を払い神罰を免れることを乞う。呉服店では、切れ

端の小布を福箱に入れ、早朝から夷切あひぎぎれと言って売り出す。

中世から善光寺の門前町として栄えた長野においても夷講が盛んに行なわれるようになったのは当然のことと言えよう。信濃の商家では、家にあるだけのお金を夷の神棚にあげ、この日にお金を出さないでいると、一年中お金に困ることがないとされ、出すことは塵芥を掃き出すことでも憚る。親類、出入の者を招いて祝い、商売繁昌を願う。

ではなぜ夷講に花火をするのであろうか。前述のように夷は、速くから寄り来る客神である。山国信濃では夷は天から山の頂に降臨すると考えられていた。その天降り著く場所を知らせる為の合図の火祭の変形として花火を打ち上げるようになったのではないか。折口は、「日本では、秋、冬の区別が明瞭でない。十月十一月十二月の行事は、結局同じ行事の繰返しである。……冬祭は、田舎では御火焼き山の講を中心としている」^{注(4)}と述べている。信濃において、十月十一月に各地で行なわれた、風祭、松明祭、夷講等の宵祭に、遅くまで大火を焚いたり、大松明に火を付け、転がし投げて練り歩く行事が見られる。

この火祭の客神への合図の火が、火よりも高く上り、明るく輝く花火に移行していったのではないか。市神の祭とも結びついて、商人の後援を得、花火は売り出しの宣伝とも重なり一尺盛ん

になっていったのである。

妻科神社の森花火も、田の神が天降り著く喬木を知らせる為とも考えられる。又、野尻湖、諏訪湖、浪鶴湖で盆に行われている花火も、黄泉の国から降り来る霊の目標としての、どんどん火や高燈籠の火の変形であろう。

今回調査をしてゆく中で、多くの煙火師が火薬の事故で死傷していることを知った。大傷をしても、肉親を失っても、一度花火の魔術に憑かれてしまった人にとっては、花火は命をかけるに足るものらしい。

何日もかけて作っても、一瞬の輝きで消えてしまう花火に、煙火師の賭けた夢は何だったであろうか。又、その花火見物を愛し続けた信濃の人々の心は何だったのであろうか。戦国時代の幕明けとしての狼煙、新しい教育開始の喜びを告げる高野一道の二尺玉、神が天から降り、古い魂が復活する為の秋祭や夷講の花火等、信濃の花火は、汚れた古い時が終り、新しい時の始る先駆けであったのかもしれない。

(お茶の水女子大学)

注(1) 堀辰雄著『幼年時代』新潮文庫

(2) 折口信夫全集第二卷 中央公論社

(3) 和歌森太郎著『神ごとの日本人』弘文堂

(4) 折口信夫全集第十五卷 中央公論社